

## “The Daughters of the Late Colonel” における時間の ‘trouble’ について

田 辺 洋 子

“The Daughters of the Late Colonel”は K.Mansfield(1888-1923) の 1920年の作品であり、彼女の最高傑作に挙げる人も多い。ストーリーの中心は、父の死から一週間を経た二人の姉妹の心理にある。三十五年前に母を失った Josephine と Constantia は、以来、自分達の幸福を顧みず暴君のように威圧的な父親に尽くすうち、いつの間にか婚期も逸してしまった。子供の頃、椅子に乗って母の遺影を妹に説明したという Josephine の思い出から、二人の年齢は四十才前後と推定される。Constantia がこれまでの自分の一生を振り返って、「何もかも言わばトンネルの中で起こったようなもので、本当の生活じゃない」(‘But it all seemed to have happened in a kind of tunnel. It wasn’t real.’)(p.402)と言うように、二人にとって父との生活は「トンネル」の中での生活だった。父が死んで気がついてみると、二人はその三十五年という空白の時間の「トンネル」の出口に来ていたという設定である。父の死後のこの一週間は、眼前に広がる「トンネル」の外の世界へいかにして踏み出すか、果してその外の世界で生きて行けるだろうか、という不安に費されたと言ってよい。「どうやって生きて行くつもりかしら」(‘I can’t think how they manage to live at all.’)(p.387)という Consantia の問いかけは、それがねずみのことを言っているにもかかわらず Josephine の神経に障ってしまうのも、図らずも彼女達自身の最大の恐怖を提示した形になったからだろう。しかし、長い

年月をかけて父が命じるままに行動する習慣を身につけてしまった二人は、自由が与えられた今となっても、何一つ決断を下すことができないでいる。何かにつけ、「明日決めましょ」(‘We can decide tomorrow.’)(p.386)、「もう一日延ばさない」(‘don’t you think we might put it off for another day?’)(p.392)というように決断を回避することは、「今」との対峙の回避であり、できるものなら時間の流れに逆って「トンネル」内の過去へ逆行したいという願望の表われと言えるだろう。

「トンネル」の出口に差しかかり、そこから飛び出す勇気がなくて、その場に留まりたい、或いは奥へ引き返したいと、絶えず戸惑う二人の姿は、様々なエピソードによって哀愁的に描かれている。題名に象徴されるように、父の存在が判然としない限り、自分達の位置付けも不可能な彼女達は、例えば主のなくなった父の所持品の居場所をどこかへ落ち着けようとする。父の帽子を porter にあげようと、かぶせたところを想像するが、頭の大きかった父の帽子は、まるでろうそく消しのように porter の頭を消してしまう。座る人もない父の椅子には、牧師がうっかり腰かけそうになるが、あわてて飛び退いてしまう。形見の時計を長男の Benny に送ろうかというところで、コルセットの空箱を思いつき、そんな物に入れたのでは不謹慎だと断念する。そのように、二人は父に代わる存在を、その持ち物によって逆に探そうとするが、いずれも失敗に終わってしまう。それは同時に、彼女達自身の位置付けの失敗でもあるために、二人の狼狽は一層増して行くことになる。そうかと思えば、父のいるはずのないたんすに鍵をかけて父を閉じこめた気になっている。父に代わるものを探しながらも、父に出て来られては困る気持ちも隠せない。二人の中には現実を避けて過去に逆行したいという願望と同時に、犠牲者としての過去を払拭したいという気持ちがあり、そのいずれをも達成できないところに、彼女達の哀しみがあると言えるだろう。

一方、姉妹の当惑を追うのに、この小説における「時」の扱い方に重点を置く見方もできるだろう。この作品は時間転換の点で文学史上画期的な

作品だと言われている。姉妹の未来への不安、現在の戸惑い、過去の回想、と揺れ動く心理に合わせて、ストーリーの時間も一切の説明的語句が加えられないまま、現在、過去、未来の間を行きつ戻りつする<sup>(2)</sup>。そのような時間転換の手法の面で興味深い作品ではあるが、本論では、むしろ先に触れた空白の時間の「トンネル」という観点から、「時」が二人の姉妹に及ぼした影響について考えてみたい。第九章にも「何か時間のことでちょっと行き違いがあった」(‘there was some little trouble about the time’)(p.398)という Constantia の言葉が出てくる。この言葉も全く無関係な脈絡で無意識的に使われているにもかかわらず、作品のテーマと非常に密接な関係があるようだ。二人の通った「トンネル」こそ時間の最大の‘trouble’と言えそうだからである。「トンネル」に代表される時間の‘trouble’のモチーフは絶えず作中で繰り返されている。それらを具体的に見ながら、最終的にはその‘trouble’が二人の女性にどう関係しているのか明らかにしたいと思う。

ストーリーは、時計の文字盤を思わせるように十二章から構成されている<sup>(3)</sup>。物語の「時」は、「父が死んでこの一週間というものは…」(‘The week after was…’)(p.386)という内的独白で幕を開ける第一章から、その後様々な飛躍を見せながら、再び第十二章で「父が死んで一週間」(‘A week since father died’)(p.400)と響いて聞こえる barrel-organ の音となって、元の時点に戻ったことが告げられる。内容的にも、「どうやって生きて行くつもりかしら」と他人事のように発せられた前述のあいまいな問いが、最後は、「じゃあ、これからどうしたら」(‘But now?’)(p.401)という抜き差しならないはっきりした形の問いとなって繰り返されている。時間も関心も、針が一周するように、一点に帰ったと言えるだろう。

そのような構成に加えて、作中には実際の時計が幾度か登場する。それらは、看護婦 Andrews の時計、父の形見の懐中時計、居間の時計、の三

つであるが、いずれにも共通した点があるようだ。第一の時計は、父の臨終の場面に出てくる。父に最後のお別れを告げるために姉妹が部屋に入ってみると、付き添いの Andrews が父の手首を取り、自分の時計を見ている(‘holding his wrist and pretending to look at her watch’)(p.389)光景にでくわす。そんな行為は不必要なばかりか、気がきかなさすぎると、二人が彼女のやり過ぎに憤慨するとおり、その行為も時計自体も、形ばかりの無意味なものにすぎない。次に父の形見の懐中時計だが、姉妹はこれを誰に譲るか思案し、最初に Benny を思い浮べる。ところが、彼のいる Ceylon までの道のりや、暑い地方ではチョッキは着ないのではないかという懸念から、彼は相応しくないということになる。次に London 滞在中の彼の息子の Cyril に渡そうと決めるが、それも最終的な決定がなされる前に女中の Kate に邪魔されて、それきりになってしまう。父の時計は、当分使い手の決まらないまま止っているだろうということが予測される。最後に居間の時計だが、Cyril にそれが少し遅れていると指摘されると、Constantia もそんな気がして、遅れているか進んでいるかはっきりしないが、「ともかく、そのどちらかだ」(‘It was one or the other.’)(p.396)と確信するに至る。つまり、この時計は正しい時だけは刻んでいないことになる。このように各々の時計は、空しく時を刻んでいるか、止ってしまうか、誤った時しか告げていないか、である。いずれも ‘trouble’ をかかえた時計だと言えるだろう。

では、以上の三つの時計に加えて、Josephine と Constantia を時計にたとえてみた場合、その時計が果して正しく時を刻んでいるかどうか考えてみたいと思う。次のようなエピソードがある。

For it was always to the drawing-room they retired when they wanted to talk over Kate.

Josephine closed the door meaningly. ‘Sit down, Constantia,’ she said, still very grand. She might have been receiving Constantia

for the first time. And Con looked round vaguely for a chair, as though she felt indeed quite a stranger.(p.398)

女中の Kate のことを話す時は「いつも」(‘always’) 決して居間に引きこもるはずなのに、Josephine はまるで「初めて」(‘for the first time’) であるかのように Constantia を迎え、Constantia もまるで「初めての人」(‘a stranger’) のように椅子を探している。ここでは「いつも」であることが、暗黙のうちに「初めて」に変えられる了解が成立している。あまりにも単調な「いつも」決ったことの繰り返しの生活の中で、二人はそれを「初めて」に変えることで何とか生活を生きるに値するものにしてきたのではないだろうか。大胆にも父をたんすに押し込んでしまった時にも、Constantia は「一生でたった一度くらい弱くたっていいじゃない」(‘Why shouldn’t we be weak for once in our lives, Jug?’)(p.393)と言うが、強い父に対して常に弱者であった彼女達は、何事につけ自分達の弱さもそれが一度限りだと自己暗示をかける以外に、その弱さの屈辱を払い除けることができなかつたと言える。「いつも」弱くある度に、「一度くらい」弱くていいと言い聞かせてきたのだ。そして、この ‘always’ を ‘for the first time’ 或いは ‘for once’ に変えることこそ、二人が長い「トンネル」の中で身につけた一種の呪い<sup>まじな</sup>なのである。以上のように Josephine と Constantia という時計は、「トンネル」の外に流れる正常な時とは別の仕方<sup>まじな</sup>で時を刻んでいる、或いはもはや ‘for the first time’ という錯覚の時に停止したまま時を刻んではいないと言った方がよいかもかもしれない。

二人が時を刻んでいるかいらないか、という問題に関しては、ある興味深い表現がある。それは、Constantia の「そんなに時間が経った後で動いている方がおかしいわね」(‘it would be very strange if after all that time it(=the watch) was(=was ticking)’)(p.395)という言葉である。ここでいう時計は、父の形見の懐中時計であり、これを Ceylon まで送ったら、当然向うに着く頃には動いているはずがないということも言ったも

のであるが、今一度この表現を姉妹に当てはめ、父の時計を彼女達自身に置き換えてみたいと思う。するとこの言葉は、「三十五年の月日の後では、私達の身も心も正常に動いている方がおかしい」ということになり、時の‘trouble’と姉妹の関係が最も端的に言い表わされるのではないだろうか。先にも触れたとおり、この姉妹という時計はある意味で狂っていた。だが、それと同時に、姉と妹各々に、もはや動いていない、言い換えれば、成長を遂げていないと思われる点もあるようだ。これからは、二人が各々どのような形で時を刻むのを止めてしまっているか、考えてみたいと思う。最後の章で示されたように、二人の最大の悩みは‘Now?’という問題だった。その悩みが姉妹共通の悩みだとすれば、互いが‘Now?’という問いの前に発した別個の問いこそ、各々のかかえた個人的な悩みだと言えそうだ。二人は共に、自分の内部にあつて、しかも説明できないものに突き当たり、その正体に当惑している。一人の女性として姉と妹が空白の「時」によって負わされた‘trouble’は一体何だったのか、その別個の問いから探っていくことにしよう。

まず、姉の Josephine について考えてみたい。

Some little sparrows, young sparrows they sounded, chirped on the window-ledge. *Yeep—eyeep—yeep*. But Josephine felt they were not sparrows, not on the window-ledge. It was inside her, that queer little crying noise. *Yeep—eyeep—yeep*. Ah, what was it crying, so weak and forlorn? (p.401)

これが彼女が‘But now?’と言う前に、自らに問いかけた謎である。彼女の中で「泣いている」ものとは何だろうか。

Josephine は実際家ですっかり者を気取っているが、その反面、確かによく涙を見せている。例えば、これまで二十三通の悔みの手紙に返事を書き、その度に泣いてしまったし、父を埋葬した帰り道でも、無断で埋めて

“The Daughters of the Late Colonel”における時間の‘trouble’について 17

しまったことを父に叱られるのではないかと思って泣いた。たんすを開けると父が出てきそうな気がして、べそをかいてしまったこともあった。二十三日も泣いてしまって自分でも「どうかしてる」(‘Strange!’)(p.387)と言っているように、彼女自身、よく泣く訳がわかっていない。この涙もろい性質を考えるに当って、彼女の寝ている姿勢を参考に見ようと思う。

Josephine arched her spine, pulled up her knees, folded her arms so that her fists came under her ears, and pressed her cheek hard against the pillow. (p.388)

弓なりに、手足を折り曲げて縮こまったこの姿勢は胎児を連想させる。つまり、彼女のよく泣く性質は幼児性につながるのではないだろうか。他にも彼女の幼児性を伝える要素は幾つかあるようだ。先述の父の帽子からの連想でも、彼女は porter の頭に父の帽子をかぶせて、それを突然ひよいと消してしまい、くすくす笑い出して、止まらなくなってしまった。その想像自体がいたずら好きな子供の空想と言えるばかりか、そのくすくす笑いは、「習慣に違いない」(‘It must have been habit.’)(p.386)のだ。そしてその習慣とは、厳格な父を憚って忍び笑いをしていた子供の頃からのものだという事は容易に推測できるだろう。また、彼女がたんすの場でべそをかきそうになった時に見せたくしゃくしゃの顔は「小さい頃そっくりそのまま」(‘just as she used to in the old days when she was going to cry’)(p.395)なのである。

さらに彼女には、寝姿からうかがわれたとおりに、子宮の世界を思わせるような小世界に引きこもろうとする傾向がある。Andrews の食事の仕方が気に入らなくて顔をそむけた時、彼女はテーブルクロスを一心に見つめるが、その様子はまるで「小さな昆虫」(‘a minute strange insect’)(p.388)がその織り目をくぐり抜けるのを見ようとしているかのようなようだった。その時の彼女は、不愉快な Andrews との現実を逃がれて、小さな昆

虫の世界に入り込んでいたに違いない。Constantia と一緒にインドの飛脚を想像する時にも、彼女が連想する男性は「小がら」(‘tiny’)で「ありのように」(‘like an ant’)(p.394)ぴかぴか光っている。男性と言えば、父とその友人、或いは牧師以外にはほとんど知らない彼女には、描こうとしても普通の男性が思い浮ばず、代わりに自分に親しい小宇宙の小さなありが出てきてしまう。彼女の暮らす世界は、まるで子宮の中のように一切の男性から守られた世界だと言えるだろう。

最後に彼女は母の写真を前に、これまでの人生を振り返る。もし母が生きていたなら結婚できていたかしら、という疑問は、母がいたなら父との隷属的生活から救われていたのではないかということ意味し、庇護者としての母の姿が浮び上がってくるようだ。その母の写真を前にした時、聞こえてきたのが先のすずめの鳴き声である。鳴いているすずめが彼女には「幼い」(‘young’)と聞こえる。体の中から聞こえてくる「幼い」すずめの鳴き声とは、彼女自身の幼さではないだろうか。「弱々しくわびしげな」(‘so weak and forlorn’)その泣き声は、人生に行き暮れた迷い子としての彼女自身の泣き声ではないだろうか。

それでは、実際家の Josephine に対して空想家の Constantia の当惑に耳を傾けることにしよう。

But it all seemed to have happened in a kind of tunnel. It wasn't real. It was only when she came out of the tunnel into the moonlight or by the sea or into a thunderstorm that she really felt herself. What did it mean? What was it she was always wanting? What did it all lead to? Now? Now? (p.402)

彼女の悩みは、自分の中で「求めている」ものは何か、ということにある。ここでもまた、Josephine の場合と同じような手順を踏みたいと思う。以下は物語の冒頭に見られる Constantia の寝姿である。

“The Daughters of the Late Colonel”における時間の‘trouble’について 19

Constantia lay like a statue, her hands by her sides, her feet just overlapping each other, the sheet up to her chin. (p.386)

丸まっていた Josephine と対照的に、Constantia は「彫像のように」(‘like a statue’)伸び切った姿で横たわっている。読者はいきなり「彫像のような」という表現に戸惑うが、最後の章で初めて、それが彼女のお気に入りのお仏像(‘Buddha’)と関係があることがわかる。まずその Buddha から考えてみたいと思うが、それはこの Buddha が彼女のえたいの知れない欲望とも密接な関係があると思われるからだ。即ち、いつも微笑んでいるように見えるこの像は、彼女が先のような問いを発する時、微笑むばかりか、何か知っているような表情をするのだ。

He knew something; he had a secret. ‘I know something that you don’t know,’ said her Buddha. Oh, what was it, what could it be? And yet she had always felt there was…something. (p.401)

この Buddha の見せるしたり顔の微笑みは、Mansfield の作品の多くで見うけられるものだ。これは、あこがれの世界に属する者がその世界に入りたがっている人間へ向ける、言わば shut-out の微笑みであり、同時に性的な意味合いを持つ場合が多い。“Prelude”の Linda Burnell も “The Little Governess”の主人公も、一言で言えば彼女達の不安定な性の未熟を嘲笑されていたと言える。すると、Buddha が知っている Constantia の欲望も当然、彼女の性に関係があると考えられるだろう。彼女が夢にふける時、その幻想の世界にいつも現われる「ラクダの列」(‘that line of camels’)(p.388)はもちろん Buddha の世界の象徴であり、彼女自身、Buddha に対する気持ちも「あこがれのようなもの」(‘like longing’)(p.402)と告白している。また一方で、彼女には月光に強く引かれるところがあり、C. A. Hankinの指摘にもあるとおり、月光が両性愛的願望を

引き起こす誘惑の光だとすれば、<sup>(4)</sup>この二つのあこがれの気持ちを考え合わせる必要が出てきそうだ。そこで、Constantia 自身の容姿が問題になってくると思われる。それに関してはあまり多くの描写はないが、彼女は「長く青ざめた顔」('long, pale face')(p.388), 「長い腕」('long arms')(p.397)をしていて、Josephine よりも「背が高い」('tallest')(p.392)ということがわかっている。そのような容姿を念頭に置くと、彼女の「彫像のような」寝姿は、多分に同性愛的傾向にある narcissism の色を帯びて来る。即ち、その寝姿は Buddha へのあこがれが先にあつて、そこから生まれたというよりはむしろ、本来彼女の姿は彫像のようであり、彼女の中に具わる両性愛的偏向が、男性同様女性に会う機会も少なかったために自己へと向けられ、自分に似た Buddha へのあこがれという形となって表われたのではないだろうか、ということだ。Constantia 自身の中にある「求めている」ものとは、この両性愛に達し得なかった narcissism と言えるのではないだろうか。そして Buddha へのあこがれはそのような偏向が生んだものであるが故に、彼女には彼がその秘密を見抜いて嘲笑しているように思われるのだ。彼女が彼に対して感じる「苦痛にも似た快感」('pleasant pain')(p.401)の謎もそこにありそうである。

Constantia の narcissistic な傾向は、彼女が想像した飛脚の姿からもうかがわれる。彼女が思い描いた男は「やせて背が高い男」('tall, thin fellow')(p.394)だった。ここでもまた彼女は Buddhaに似た男性、言い換えれば自分に似た男性を思い浮かべている。彼女の心理の根底に自己愛的な欲望があるために、その男の中に「何か盲目的で疲れを知らないところ」('something blind and tireless')(p.394)という現実の男性特有の横暴さを感じ取ると、とたんに「とても不愉快な男」('a very unpleasant person')と思ってしまうのだろう。

Constantia はそのような欲望の実体がかめないながらも、それに対する罪の意識も同時に感じているようだ。彼女には、月光に誘われて、ベッドから夜着のまま抜け出し、床の上に「まるではりつけにされたように」

(‘as though she was crucified’)(p.402)面腕を広げて身を横たえる癖がある。先にも触れたとおり、彼女は月光に誘われ、それを全身に浴びることに性的欲求の吐け口を見出しているが、その一方でそれを抑えようとする意識が「はりつけ」の姿となって現われているのではないだろうか。‘crucified’ という言葉どおり、彼女は自分の中にあるものを不浄と感じ、そのような罪を犯している自分を、自ら極刑に処そうとしている。欲望も、それを抑えようとする気持ちも、全て無意識のうちに進行しているのだ。たんに父がいることにして鍵をかけてしまった時の彼女の驚くべき大胆さも、この同じ浄化作用から来ているのかもしれない。その大胆さを見て、Josephine が、たんすが Constantia の上に倒れかかってもちっともおかしくないと思ったように、Constantia 自身も押しつぶされるのを覚悟の上でしたに違いないからだ。彼女はむしろ喜んでたんすに押しつぶされ、床に「はりつけ」られようとしたのかもしれない。

以上述べたように、空白の三十五年間という時の ‘trouble’ は Josephine においては幼児性、Constantia においては未熟な自己愛的性欲という彼女達自身の ‘trouble’ を引き起こした。二人の女性の内部には、各々そのような形で成長を止めてしまった部分があり、それらが彼女達の個人としての当惑の核心になっていると言えるだろう。

父の死後一週間の中に、姉妹は様々な方法で自分達の存在の位置付けを試みてきた。たとえば「父は決して私達を許さない」(‘Father would never forgive them.’)(p.391)<sup>(5)</sup>という否定的な呪文の中にさえも、自己の存在理由を求める気持ちがうかがわれる。父の許可なく父を埋葬し、父の部屋に入ってたんすの整理をしようとしたことが「決して許されない」行為だと自らに言い聞かせることで、死者と自分達との関係を保ち続けようとしているからだ。しかし、「父が死んで一週間」たった今、「父のつえはもう二度と鳴らない」(‘It never will thump again.’)(p.400)という厳然たる事実突き当たる。この「今」という時から、即ち「父のつえはもう二

度と鳴らない」という事実から、二人は決して逃れることはできない。二つの文句を繰り返す barrel-organ の調べは、一週間のうちで行われた様々な二人の逃避の企て全てが失敗に終わったことを告げている。「過去」へ逆行しようとする自分達自身を「今」へ立ち向かわせようとする心の声が二人の中で響いていると言えるかもしれない。しかし、当面の 'Now?' という問いに対して、二人には何の解答も用意されてはいない。あたかも「今」に何らかの希望があるかのように一瞬現われた太陽は、再び雲に隠れてしまった。その雲を見つめながら、何が言いたかったのかお互いに「忘れてしまった」('I've forgotten.')(p.402)姉妹の前途には老いと貧しさだけが待っているのかもしれない。しかし、本来芽生えてさえいない希望を「忘れてしまった」ことにする姉妹の中に美しさを感じるのは作者一人ではないだろう。<sup>(6)</sup>

それでは最後に、作品の内容とは無関係なもう一つの思いがけない時の 'trouble' を指摘しておこう。それは最後の第十二章で、この作品が果して時計の針のように一周して第一章の「今」に戻っているかどうかという疑問である。確かに第十二章は、「父が死んで一週間」となって第一章の「この一週間というものは…」に一致する。しかし第一章から順を追うと、正しく「今」に戻って来ないようだ。以下、各章の「時」を結んでみよう。(I) 父が死んで一週間後の「今」——(II)「今」に視点を置いて、一週間前の父の最期の朝からこれまでの Andrews との生活——(III)「今」に視点を置いて、父の臨終の場面——(IV) 臨終の日の午後——(V) 埋葬の日——(VI) 埋葬の日から二日後の朝(父の部屋の整理をする)——(VII) 前に同じ(父の部屋から居間へ)——(VIII) 前に同じ、その時点から父の生前の思い出へ——(IX) 父の思い出から再びその時点へ——(X) 前に同じ、——(XI) Kate とのこれまでのこと、再び前に同じ——(XII) 前に同じ。

つまり(VI)から(XII)までは埋葬の二日後のある日から基本的な時

は動いていない。すると、それが「今」に一致するためには埋葬が父の死から五日後にならなくては行けない。しかし「埋葬から二日後」という定義自体、それが「父が死んで一週間」ではないことを示している。「埋葬から二日後」から、どんな「トンネル」をくぐって「父が死んで一週間」になったのかわからないが、それを作者のミスとするよりも、読者がすでにそこに違和感を抱かないほど時の飛躍の魔術に幻惑されていることの方を考えるべきではないだろうか。

(注)

テキストは *The Stories of Katherine Mansfield*, Ed. by Antony Alpers, Oxford University Press, London, 1984 を使用。本文引用は全てこれからであり、頁数は引用に続けて括弧に入れて示す。

- (1) この作品は従来、1920年12月13日に一気に書き上げられたと考えられていたが、Antony Alpersによれば、それは後半部分であって、前半はその少し前に出来ていたらしい。  
Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield*, The Viking Press, New York, 1980, p.321-p.323.
- (2) 内容と形式の関係、とりわけ独特の状況描写によって内容を形式に依存させる方法は、David Daiches によって指摘されているとおりだ。David Daiches, *New Literary Values*, Oliver & Boyd, Edinburgh, 1936, p.84.
- (3) 構成については C.Hanson & A.Gurr が作品を前後半に二分してその対称性を分析している。Clare Hanson & Andrew Gurr, *Katherine Mansfield*, The Macmillan Press, London, 1981, p.90-91.
- (4) C. A. Hankin, *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories*, The Macmillan Press, London, 1983, p.203.ただし、彼女は Constantia の願望の対象は漠然とした女性か又は彼女の母親としている。作中、Josephine に反して Constantia は直接的に母親との関連で描かれた部分はないので、この指摘は不十分と思われる。
- (5) C. A. Hankin はこの言葉の伝える恐怖心を姉妹の父に対する潜在的な殺人願望から生まれたものだとして指摘している。注(6)でも示すとおり、二人の人生に‘beauty’を見出した作者がそこまで意図していたかどうかは疑問だ。C. A. Hankin, p.201.
- (6) 1921年1月に Gerhardi にあてた手紙で作者は次のように言っている。  
…There was a moment when I first had ‘the idea’ when I saw the two sisters as *amusing*; but the moment I looked deeper (let me be quite frank) I bowed down to the beauty that was hidden in their lives and to discover that was all my desire …